慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | エルスナー著 千葉秀雄訳 経済恐慌 |
| Sub Title | |
| Author | 常盤, 政治 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1955 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.12 (1955. 12) ,p.956(52)- 959(55) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19551201-0052 |
| Abstract | |
| Notes | 書評及び紹介 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19551201-0052 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あることは否定できない。しかしそれが一面において形式的無内容性を露呈するにしても、他面なお現狀維持の武器として技術的實踐性をもちうるのは何故であるか。例えば彼はケインズ體系の基本的部分が單なるマルクスの剽竊にすぎぬと主張するが、その説明は未だ人を充分納得させるものとはいいがたい。また因果體系における循環論の問題も、同時決定の均衡理論においては一定の與件を動因として規定する場合には一應回避することができるし、孤立的人間の經濟合理的理想型も、個人心理の集團的分析による自然科學的法則性に裏附けられることにより、部分的にもせよ實體的内容を獲得することは必ずしも不可能ではない。問題はかようにして構成された類型の檢討が、必ず政策的實踐によらざるをえぬというところにあるが、これとても直接階級闘爭の場において自己の階級に反逆する實踐に身を投ずる以前に、人は既にその誠實な科學的認識の過程において自己の物的立脚點との矛盾におちいらざるをえぬ場合のありうることは、ベーレンスもまた認めている。勿論このようなモデルは、「資本制的生産過程の總姿容」を一擧に洞見せしめるには不充分であろう。しかし近代經濟學理論の主要な課題とするところは、本質的な社會法則を必ずしも洞見することなくして、しかもかかる法則を實現せしめるための契機として行動する經濟主體の働き、及びその「個人誤差」に關する分析である。例えば市場における總欲望の彈力性は、單に社會的總欲望と價値の分配過程によつて制約された欲望との關係のみによつて規定されるものではないことは、需要函數の分析によつても證明することができる。これは擴大再生産の圖式における蓄積率や消費量についても、等しくあてはまるところであろう。そしてこれらすべてのことは、マルクス理論による近代經濟學批判が單なるその反動性のばくろに止まるものではなく、その内に含まれているすべての實體的内容を殘ることなく自己の武器にまで轉化せしめるものとならなければならぬことを物語るものではあるまいか。（岩波書店刊・昭和三〇年五月・一八〇圓）・

（一九五五・八・四）　（中鉢　正美）

---

エルスナー著
千葉秀雄譯

## 『經濟恐慌』

### 一

ナチス政權崩壞とともに歸國し、現在、ドイツ社會統一黨中央委員會政治局員、同中央委員會附屬社會科學研究所經濟學教授、同理論機關紙「アインハイト」誌の主幹として黨内で重きを占め、指導的な活動をなしている著者は、本書『經濟恐慌』(Die Wirtschafts-krisen, Erster Band; Die Krisen im vormonopolistischen Kapitalismus, Dietz Verlag, Berlin, 1953.) によつて、國民賞（プライス）を與えられている。

本書は、原書の副題で明らかなように、獨占資本主義に至る前の恐慌を直接の對象としたもので、二篇からなり、第一篇（マルクス主義の恐慌理論）において恐慌生起の理論的考察を行い、第二篇（一九世紀末葉にいたる經濟恐慌の歴史の概要）において、恐慌の具體的な現象形態を分析してその實證的な裏附けをするという方法論がとられていることが一見して看取せられる。譯者が、「その理論と歴史」と副題をつけられたのは、その内容の篇別構成に由來するものであり、適切な副題といえよう。

從つて、本書の理論的骨子は第一篇、とくに第二章（恐慌の可能性）と第三章（恐慌の必然性）にある。そして、この第一篇第二章と第三章に、第二篇の第五章（産業資本主義以前の恐慌）と第六章（一九世紀の週期的恐慌）がそれぞれ對應せしめられているようである。

### 二

第一篇第一章においては、「ブルジョア的景氣研究が恐慌を説明する力のないこと」（一二頁）を明らかにしてブルジョア的景氣研究の破綻を指摘しつつ、「しかし、ブルジョア國民經濟學の破綻は經濟科學一般の破綻ではな」く、「プロレタリアートの科學であるマルクス主義は、經濟恐慌の問題についても、あますところなく、これを解決した」（一四頁）と強調する。そして、「マルクスは恐慌についての彼の見解を包括的に敍述したものを殘すことができなかつたのだから、マルクス主義の恐慌理論というものはない」とする見解に對して、「われわれは『資本論』三卷のなかに、『剰餘價値學説史』のなかに、また、その他のマルクスの著作のなかに、完成された恐慌理論を見いだすことができるのであつて、その恐慌理論は、恐慌の可能性、必然性および週期性を説明するのに十分なものであり、同時に、いかにして恐慌を克服しまぬがれることができるかということをも示している」（同上）と力説し、更に「われわれにはこの理論を總括し、これをマルクス以後の經濟的發展に適用し、そこからそれに照應する諸結論をひきだすという任務だけが課されている」（同上）となして、恐慌論の課題と、今後の恐慌論研究家の任務を指摘している。このことは、とくに宇野弘藏氏と久留間鮫造氏との間に行われた、いわゆる「『資本論』の編別構成よりみたる『個有の恐慌論』」論爭をはじめとして、恐慌論研究の方法論的前進のために示唆を與えているものといえよう。

本書の理論的骨子の一部をなす第一篇第二章においては、「恐慌の一般的可能性は、すでに、單純な商品生産の諸矛盾から生ずる」（一五頁）となして、單純商品生産社會の基本的矛盾を「社會的分業と私的生産とのあいだの矛盾」（同上）と規定する。かくて「商品の姿態交換のうちに、恐慌の最初の抽象的な可能性」（一九頁）を「支拂手段としての貨幣の機能から、恐慌の第二の抽象的可能性」（二三頁）を、更に「直接的生産過程と流通過程との分離」のうちに、「恐慌の抽象的可能性のいつそう進んだ發展」（二八頁）を見出す。エルスナーによれば、「しかし、これらの諸條件は、恐慌が現に存在するためには缺くことのできないものではあるにしても、恐慌の必然性を説明することはできない」（二九頁）。蓋し、第二章での「研究對象であつた單純な商品經濟は小經營にもとづいて」（三一頁）おり、「したがつて、この生産方法すなわち單純な商品經濟においては、生産方法と領有方法とのあいだにはなんら矛盾は存在しない」（三三頁）からであつた。すなわち、そこでは「兩者はと

もに私的」（同上）であるから、というのである。

ところが、「社會的生產諸力の展開とともに社會的生產諸力の性格も同時に變化し」（三四頁）、「生產は私的なものから社會的なものに發展」した（三七頁）。しかるに「領有形態だけが古いものにとどまつている」（同上）ので「それは生產の社會的性格と矛盾する」（同上）に至る。エルスナーによれば、この矛盾こそが「資本主義的生產方法の根本的矛盾すなわち生產の社會的性格と領有の資本主義的性格とのあいだの矛盾」であり「恐慌の究極の原因」なのであるが、彼が「生產の社會的性格」というとき、それは「こまごました私的な生產手段から巨大な社會的な生產手段になつた」（三四頁）ことであり、靴屋の小刀は强力な打抜機に、ハンマーは穿孔機と製釘機（Zwick-und Nagelmaschinen）によつてとつてかわられ、「もはや個々人によつて利用されるのではなく、ただ生產者の一群によつてのみ、勞働者全員によつてのみ運轉することのできる一つの複雜な生產機構が成立した」（同上）ことを意味している。從つて、生產物の完成について言えば、直接生產者は以前には「鼻を高くして……これは俺の生產物だ、これは俺がつくつたのだ」（三一―二頁）と言いえた「個人的行爲から勞働者全員が參加する社會的行爲になつた」（三五頁）ということである。これらの表現のうちに明らかなように、エルスナーは「生產の社會的性格」を技術主義的に考えているようである。なるほど生產の社會化される過程は、必然的にそのような特徵をもつて伴われるものであるが、そのような「生產手段の集積・集中、勞働過程の社會化は確立した社會的分業の生產力的內實であり、生產の社會的性格を生產力視點からみたものにすぎない」（拙稿「石渡貞雄著『農業恐慌論』」本誌昭和二十九年七月號、七〇頁）。生產の社會的性格とは、なによりもまず、社會的分業のことに他ならないのであつて、從つて商品の使用價値は、個人的な使用價値ではなくて社會的使用價値であるということである。だから、エルスナーのように、單純な商品經濟においては、生產は私的であるときめつけることはできない。それは私的であると同時に社會的でなければならない。社會的なるが故にこそ、生產物が商品として價値を有するのであり、商品の使用價値は社會的使用價値として價値の質料的擔い手となるのである。「生產物が私的消費のためではなく、社會的消費のためにあてられている」（三五頁）ことは、資本關係の存在には何らかかわりないものであり、商品生產一般において正にそうであつたのである。單純商品經濟から資本制經濟になつてはじめて、生產が私的なものから社會的なものに轉化したのではない。單純商品經濟なる概念は資本制經濟からの抽象にすぎない。資本制生產樣式に歷史的に先行する生產樣式は封建制生產樣式であつて、單純商品經濟ではない。從つて、私的生產が社會的生產になるのは、封建制生產樣式の資本制生產樣式への推轉によつてであつて、單純商品生產の資本制商品生產への轉化ではなかつたのである。論理的展開の順序を歷史的發展の順序と同一視してはならない。

この種の誤謬は「社會的生產と資本主義的領有とのあいだの矛盾は恐慌の究極の原因（letzte Ursache）」（三七頁）ではあつても、「この矛盾がただちに恐慌にみちびくものではない」（同上）く、「それは資本主義的生產方法の新しい、より進んだ諸矛盾に發展し、これらの諸矛盾がそれぞれの面で恐慌をよびおこす」（同上、傍點引用者）、といつた表現のうちにもあらわれているといえよう。ここでは、抽象から具體への上向法的（論理的）發展が、現實の經濟的發展の度合と混淆されている。

また、マルクスによつて「あらゆる現實的恐慌の究極の根據（letzte Grund）」（Das Kapital Bd. III. S. 528.）とされた「生產と消費の矛盾」（拙稿「恐慌の資本制的性格といわゆる"Der letzte Grund"について」本誌昭和二十九年八月號、一八頁以下參照）をもつて「恐慌の原因（Ursache）をなすものである」（五〇頁。S. 41.）となして Grund と Ursache との區別をせず、一方において、マルクスの恐慌理論は「恐慌を過少消費から說明するものではない」（五〇頁）と言いながら「この矛盾（「生產と消費の矛盾」……引用者）においては大衆の過少消費が決定的な役割を演じている」（同上）というとき、論理不明快乃至論證不充分といわなければならない。

## 三

その他、論理的にその連がりの不明快な箇所が尠くないが、總じて本書は恐慌理論において問題とさるべき諸理論を總括したものとして、恐慌史の概說と相俟つて恐慌論の體系的理解のために役立つであろう。だが、本書の高く評價さるべき點はむしろその點ではなく、恐慌の社會的諸結果を明らかにして（第一篇第四章）、「經濟恐慌の理論がプロレタリア革命の理論につながつて行く」（一九三頁。S. 160.）ことから「循環的發展と革命運動との關連を指摘して」（同上）、恐慌論研究の實踐的視角を再認識せしめたところにあつたのである。

その意味において、續くであろう第二卷に期待するものではあるが、一八八二年の恐慌の特殊性が「農業恐慌とむすびついていた點にあ」（三二〇頁）りながら「農業恐慌のうちに循環的恐慌の決定的原因を見るのがあやまり」（三二一頁）であるとするならば、「一般的な過剩生產恐慌」と農業恐慌との關係が理論的に解明されていなければならなかつたのではなかろうか？（B6版　三三五頁、大月書店、一九五五年三月一五日、定價三六〇圓）（常盤　政治）

---

# 市原季一著『ドイツ經營學』

## ――ドイツ的經營學の生成と發展――

戰後の我が國經營經濟學は、著しいテンポを以つてアメリカ經營學への接近をなし、ために專ら實證的個別研究に力をそそぎ、どうかすると體系化、整備化の努力が無視せられた。勿論、このアメリカ經營學への接近自體、從來のドイツ經營學が持つ、民族共同體的、規範的經營學に對する反省という意味を有して居たが、しかしそれは同時にドイツ經營學、特に規範經營學における興味ある研究をも同じ範疇のものとして排斥する傾向があつた。而して昨今に至りそ